

導入：

日本には天皇を中心とした「年号」があります。今は「平成」です。その前は「昭和」、そしてその前は「大正」、さらにその前は「明治」、そのまた前が「慶応」でした。年号はこのように、さらにずっとずっと前の時代まであります。私は「昭和」生まれで、「昭和」の持つ独特な時代のおい(?)の中で育ちました。「昭和」を知っている方々の中には、『昭和は平成よりも良かった…』と言っている方々もいます。その基準は人それぞれでしょうが、何か分かる気もします。しかしどんなに『あの時代は良かった!』と言っても、その時代に戻ることはできません。また『この時代、あの時代に生まれたかった!』と望んでも、それもできません。私達は神が導いておられる、今、この時、この時代の中で、生きて(生かされて)、日々生活する以外にはないのです。

本論：

本日の聖書箇所は創世記9章1－17です。ここには神の裁きの後で、再創造された世界の「はじめ」の部分が記されています。またそれは、あの初めの創造の時代とはまったく異なった「新しい時代」のはじまりということであり、現代の私達の基盤となった出来事です。ここには主に二つのことが記されています。

①「神の祝福」1－8節

②「神の契約」9－17節

①「神の祝福」

1－4節「それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。野の獣、空の鳥、——地の上を動くすべてのもの——それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておのこのう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。しかし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。」

大洪水という神の裁きの後で、神は再創造の世界をはじめられました。その最初の人物(先祖)となったのが、生き残ったノアたち8人でありました。その彼らに、神はかつてはじめての創造世界で、最初の人アダムにも言われた「祝福」の言葉と同じようなことを語られました。

アダムの時に語られた「祝福」の言葉は、創世記1：28－30に記されています。

「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。…見よ。わたしは、全地の上であって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える。」そのようになった。」

ここに記されているアダムへの「祝福」の言葉は、9章のノアたちに語られた「祝福」の言葉と、同じところもありますが、幾つか違うところもあります。同じ「祝福」としては、どちらも創造の世界、ある

いは再創造の世界の後に、「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と、命の拡がりという祝福が語られています。

ノアたちは、神の裁きを実際に体験し、その恐ろしさを目の当たりにしてきました。ですから、裁きの後も、変わらない神の祝福の言葉を聞いたときには、大きな喜びと、そしてこれからの世界について、大きな希望を持つことができたのではないのでしょうか。

また「生めよ増えよ」という命の拡がりとは、単にたくさん人が生まれて増えるということだけではなく、そこには神と共に生きるという、神への信仰による道徳観や倫理性、また秩序を持った社会形成、文化形成というものが、当然、含まれていることです。これは先の人アダムが出来なかったことです。また出来なかった人々を、神は今まさに洪水によって裁いたばかりです。

しかし神は、その裁きの後でも、同じ命の拡がりの祝福を、同じ人間であるノアたちに、変わらずに語ってくださり、祝福を与えてくださいました。これは、アダム達に見た先の人類の墮落した姿に、『どうせ人間はできないのだから、もうダメです。』という批判的なものではなく、神は、人間が「心に思い計ることがはじめから悪である」と分かっているにもかかわらず、再び、神と共に歩みながら、命の拡がりという祝福を、神と一緒に共有していくことを、神がご自身が望んでいるがゆえに、再び与えられたのです。これこそがまさに、神の変わらない、人への「祝福」であり、そして神からの「恵み」であり、そしてそれはまた、神の人に対する「愛」の証とも言えるのではないのでしょうか。

もう一つ同じ「祝福」としては、すべての生き物が人間の手によだねられているということです。アダムのは、「支配せよ。」と語られましたが、ノアの時には「ゆだねている。」と、神は語っています。このどちらも、結局は人間が生き物を支配し、管理するということと変わりはありません。つまり、人間はこの世界を管理していく使命を再び与えられているのです。こうしたことをキリスト教では、一般的に「文化命令」と言っています。世界の生き物を管理し、命の拡がりとは社会形成、また文化を造っていくことです。

さらにもう一つ「祝福」が語られています。それは「食べ物」の備えです。しかしこれには、アダムの時と違う点があります。アダムのは、「見よ。わたしは、全地の上にあつて、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。…」と神は語られたのですが、ノアのは、3節に記されているように、「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。」と、生き物を食料として食べて良いことが語られています。いわゆる「肉食」の許可です。

神による「食糧」の備えという点では、確かに神の「祝福」そのものですが、今度はそこに、生き物を殺して食べるということが出てきました。それゆえ2節の後半に記されているように、「これらすべてはあなたがたを恐れおののこう」と、生き物たちは、自分たちが人間に殺され、そして食べられることを「恐れて、おののく」ようになったということなのでしょう。これは先のアダムとは大きく違う点です。

また、アダムのとくに語られた「祝福」の中には、「地を従えよ」ということも語られていましたが、ノアの時には語られていません。そしてこのアダムに言われた「地を従えよ」とは、エデンの園のように潤った素晴らしい世界が広がっていた時でした。しかしアダムが罪を犯してからは、創世記の 3:17-19 に記されているように、「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得なければならない」と、土地ののろいが語られています。

つまりノアは、再創造された世界でどんなにアダムに語られたエデンの園での「祝福」を神に求めても、そこには決して戻ることが出来ないという現実があるのです。まさに、時代は変わってしまったのです。人間は、自らの罪によって変えられた、この「新しい時代」の中で生きるしかないのです。

ノアたちも、また私達すべての人間も、『自分たちは、この罪の入った現実の世界の中で、生きて行かなければならないのだ』ということ、謙虚に受け止める必要があります。そしてそれゆえの、神は食物として人に備えられ、与えられたのが、生き物を殺して食べるという「肉食」の許可でもあるのです。

この「肉食」は、生き物を殺すという、なんともかわいそうと思えることなのですが、続く4節には、「しかし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。」と記されています。また**ゼカリヤ** 18:4には「すべてのいのちはわたしのもの。」と記されていますので、最終的には、命＝血は主のものであるということです。つまり、殺された生き物たちの最後の行き場は主にあるのです。そういう意味では、私たち人間が生き物を殺して食べるということは、神の赦しと御手の中にある。と言えることなので、神は無慈悲に「生き物を殺して食べろ」と決して命じたのではないということです。

次の5節では、人の命のことについて、記されています。

5節「わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。」

食べ物の話題から、突然人の命の話題へとなりました。ここには『人が人の命を殺めた場合は、その人の命を神は要求する。』といった、いわゆる殺人の禁止とまた死刑ということが命じられています。そしてそれは「どんな獣にでも、それを要求する」と命じられています。リビングバイブルには次のように記されています。「殺人は禁止する。人を殺した動物は生かしておくな。」つまり、『獣が人を殺した場合は、獣にも死刑が課せられる』ということです。これは2節に記されていたように、すべての生き物が人間を「恐れおののく」ようになったために、獣はその恐れからか、自分の身を守ろうと人に危害を加える可能性がでてきた。ということなのかもしれません。そして、わざわざこのことが9章に記されているということは、これ以前には、そういった可能性がもしかしたら無かったのかもしれませんが、アダムが、あのエデンの園で生き物たちを管理していた時や、ノアが箱舟に動物を集めた時とは、世界が大きく、神の裁きの洪水の出来事により、変わってしまった。ということなのでしょう。

それから獣と人とは決定的に違うということが、6節に記されています。

「人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。」

再び神は、創世記1章で語られた、人は「神のかたち」である。ということを語っています。そしてこれこそが獣と人との決定的な違いです。人は獣と違い、神が人を「神のかたち」として創造されました。ですから、人が血を流す場合、すなわち殺人を犯す時は、それは造り主である「神」に対して、直接的な罪を犯しているということです。そしてそれは、自分で自分を殺めることもまた、同じように造り主に対し罪を行っているということです。そこに神が人に対する「神のかたち」としての「命の重さと尊重」があります。獣にはそこまで命の重さを理解することはできません。彼らには理解できないのです。しかし、人間には、それが理解できるように造られているのです。

ですから、人の命というのは、自分勝手に自分が思う様に生きて行く存在ではなく、尊い神に尊く創造された存在である。ということが言えます。だからこそ命は重く尊いのです。

さて、殺人と聞くと、どこか遠くのこと、おおよそ自分とは関係の無い話のように聞こえなくもあり

ません。ヤコブ 1:15 には、「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」と記されています。最初の人アダムとエバは、食べてはならないと言われていた木の実を食べたことから、罪を犯し、自らを死ぬ者となりました。まさに愚かな自殺行為でした。その原因だったのが、『食べたい』という『欲』、すなわち『食欲』でした。この欲がはらみ、罪を生み、そして死を生みました。はじめはたった一つの食欲だったことから、取り返しのつかない罪と死を招いたのです。

同じように、私達の日常にも、はじめはたった一つだったということから、あるいは小さなことであつたものから、今では実に多くの欲と罪との戦いが、日常的にあつたりはしないでしょうか。そういう意味では、私達も決して欲から罪へと、そして血の罪、殺人を犯すということから、遠いとは存在であるとは、誰も言えないのではないのでしょうか。

ですから神が、殺人を禁止するという戒めは、罪を容易に犯してしまう人間には、どうしても必要なことであつて、またこの戒め以外には、悲しいかな、殺人という罪から人間を守るすべがない。と言えることなのです。実に、神がこのように人に対してお決めくださらなければ、人は簡単に人を殺めてしまう現実があり、歴史はそのことを私達に教えています。

しかし、この「殺してはいけない」という戒めの最大の目的は、『人が神のかたちに創造されているゆえに』ということが何より大切なことです。すなわち、人が神のかたちとして創造されたのは、『神と共に歩む存在である』ということ、人は良く理解して、神との豊かな交わりを保ちつつ、そして正しく神の前に生きて、神の祝福に与りながら生きて行く存在であるということのために、この戒めがあるのだ！ということなのです。

今日、そういう意味では、肉体は生きていても神と共に歩まずに、死んだように生きている人々が実に多くいるのではないのでしょうか。このこともまた、実際には、神のかたちというものを殺しながら、ただ時間だけを経過させているという生き方になっていると、言えるのではないのでしょうか。

クリスチャンである私達には、こうした神のかたちを殺している「人」に、人間の本当の価値を伝える使命があります。そして、人が神のかたちとして神と共に歩む存在であることを、心から喜び、また感謝し、その命の豊かさの中で、増え広がり、満ちて行くことこそが、まさに神が与えた人への「神の祝福」なのです。

②「神の契約」

ノアは洪水の後、神のことばに従って箱舟から出てきて、最初に礼拝を捧げました。またその時、全焼のいけにえを神に捧げました。それゆえ神は、その全焼のいけにえから立ち昇る「なだめのかおり」をかがれ、心の中の思いを明らかにされました。それが 8 : 21 - 22 の最後のところに記されています。

「主は、そのなだめのかおりをかがれ、主は心の中でこう仰せられた。「わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。地の続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜とは、やむことはない。」

この神の心の中の思いを、神は具体的に「契約」として、ノアとまたその息子たち、さらには後の子孫にまでもはっきりと約束してくださいました。それが 9 : 9 - 17 に記されています。

まず 9 - 10 節には、「契約対象」が記されています。

「さあ、わたしはわたしの契約を立てよう。あなたがたと、そしてあなたがたの後の子孫と。また、あな

たがたといっしょにいるすべての生き物と。鳥、家畜、それにあなたがたといっしょにいるすべての野の獣、箱舟から出て来たすべてのもの、地のすべての生き物と。」

ここには、人間だけではなく、すべての生き物にも、そしてさらにそれは子孫にまでも引き継がれるという普遍的な約束です。

また 11 節には、「契約の内容」が記されています。

「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない」

これが、「契約の内容」です。

12-14 節には、「契約のしるし」が記されています。

「さらに神は仰せられた。「わたしとあなたがた、およびあなたがたといっしょにいるすべての生き物との間に、わたしが代々永遠にわたって結ぶ契約のしるしは、これである。わたしは雲の中に、わたしの虹を立てる。それはわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが地の上に雲を起すとき、虹が雲の中に現れる。」

神は「契約のしるし」として、「虹を立てる。」とおっしゃいました。聖書ではここで初めて、「虹」という言葉が出てきます。これまでのアダムが居た創造の世界では、「虹」というものが無かったことを意味します。なぜなら、もし創造の初めの時代に、「虹」を見たことがあるなら、この時「契約のしるし」には、なり得ないからです。また創世記 7：11 には、あの洪水という神の裁きの時に「天の水門が開かれた」と記されています。さらにそれよりも前の創世記 1 章の 6-7 節では、「大空が水の真ただ中にあれ、水と水との間に区別があれ。・・・大空の下の水と大空の上の水とを区別された。」と記されています。ある注解者は、『神の裁きの洪水の後、すなわちノアの虹の契約の時から、地球の大気に大きな変化があり、紫外線などの様々な影響により、人々の寿命が極端に次第に短くなっていった。』というようなこと記しています。確かにこの後創世記の 11 章まで進んでいくと、人の寿命というのが極端に短くなっています。もし本当に、この創世記 9 章においてはじめて地球上に虹が出来たとすれば、ノアたちはこの時初めて「虹」を見たのです。それゆえに、はっきりと「契約のしるし」が分かったということです。

今、私達の目には、はっきりと「虹」は見えて、確認することが出来ます。そして、それはどこからでも見る事が出来ます。虹は、人々、あるいは動物たちがどこからでも見る事が出来る神の契約のしるしなのです。

また「虹」という言葉は、戦いで使う弓矢の「弓」を意味してもいます。それで多くの注解者が、『この虹は、人に向かって構えられている形ではなく、もはや戦いの必要がないために、矢が抜かれて、天に向かって弓が置かれている形であり、すなわち、この虹は、神との平和と和解を意味している』等と記しています。つまり虹は、神との和解のしるしとして、神と地との間に掛けられているということです。

15-16 節には「契約の目的」が記されています。

「わたしは、わたしとあなたがたの間、およびすべて肉なる生き物との間の、わたしの契約を思い出すから、大水は、すべての肉なるものを滅ぼす大洪水とは決してならない。虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」

この神のことは、実に不思議です。なぜなら、「しるし」としての「虹」を造られるお方が、その「虹」を造っておいて、その意味が分からなくなるということは、ありえないからです。ですから、ここで主が言わんとしていることは、それは私達人間に対して言ってくださっているのであって、神はわざわざ、こ

の様に言うことによって、人への神の忍耐とあわれみを示してくださっている。ということです。

そしてそれが、たとえ「人の心の思い計ることは初めから悪である」という罪人の私達に対してであっても、神は虹を掛けることによって、神の忍耐を示し続けてくださる。という証なのです。

ですから、私達が虹を見るたびに、単に『虹は綺麗だなー』ということではなく、裁きの神の忍耐があるということに感謝すると同時に、決して忘れてはいけない罪の裁きが実際に及んだ後なのだ！ということです。

主イエスは、「わたしは再び来る」と言われました。

2ペテロ3：6－7にはこのように記されています。

「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」

主は再び来られます。そしてその時は、今度は水ではなく火を持ってこられるのです。その時に裁かれないように、私達は、今見ている神のあわれみのしるしである虹を見て、神が実際に居られることと、神の裁きが実際にあったことを思い出しながら、その中でさらに、未来に襲い掛かる「火による滅び」から救われるために、神との平和と和解の弓となり、虹となり、懸け橋となってくださった主イエス様の十字架の贖いを見つめる者でありたいと願われます。「神の契約」は未だ私達の上に輝いているのです。

アーメン。